

前回までの大学院部会での大学院評価に関するご意見と今後の論点

前回までの会議で議論された論点及びご意見は以下のとおり。その上で、今後議論を深めることが必要と考えられる論点は以下のとおりである。

1. 総論

【主なご意見】

- ・評価の目的を明確化すべき。
- ・大学院は「高度に考える機会」を提供する場で、学部と異なる目的を有する。
- ・分野によって求められる能力が大きく異なる。
- ・学部と大学院はそもそも評価枠組みを別にすべき。
- ・機関別の評価はガバナンス確認に重要であり、分野別の評価と併用すべきである。

→ 大学院段階においても、学部段階と同様、高等教育機関の多様性も考慮しつつ、各大学が定める DP に掲げる資質能力が、大学で行う教育や学生の学修を促すことを通じて身についているか（学生が成長しているか）、加えて、評価を通じて大学院が自らの教育改善の PDCA サイクルを有効に機能させているかを確認できる仕組みとすることを前提に、大学院の特性を踏まえ、学部段階とは異なる評価方法を検討する必要があるのではないか。

2. 評価指標について

【主なご意見】

- ・単一の物差しで比べると競争が類型化し個性あるプログラムが伸びづらくなる。
- ・国際会議への出席や論文数などを重視すると多様性が損なわれる可能性がある。
- ・学修成果を長期スパンで見ることが重要である。
- ・社会での活躍の状況も参照できるとよい。
- ・研究成果は短期では出ず、時間軸を踏まえる必要がある。
- ・学生の成長は指導教員の力量に左右される。

→ 大学院の多様性を評価し、かつ個性を伸ばせるような評価指標が必要。その際、修了後の活躍状況も含め、長期的な時間軸で学生（修了者）の伸びを測る仕組みが必要ではないか。

3. データの収集について

【主なご意見】

- ・多様な学生の声を丁寧に拾う必要があり、アンケートに加え直接学生（修了者）の声を聞くとよい。
- ・社会人としての活躍、企業での評価、出口側の評価も参考すべきである。
- ・キャリア先がどのように修了者を評価するかが重要である。

→ 学部段階における学生調査等の仕組みも参考に、学生アンケートにより在学生の声を聞くことは重要。それに加え、ヒアリングなど学生（修了者）の声を直接聞ける仕組みがあるとよいのではないか。また、学生のみならず、就職先等、出口側の評価も聞くとよいのではないか。

4. 国際通用性・国際認証との関係について

【主なご意見】

- ・国際基準との整合性を確保すべきではないか。
- ・国内独自基準は最小限として、必要な追加部分のみを評価対象とすることではどうか。
- ・世界大学ランキングで参照される基準や軸も考慮する必要があるのではないか。

→ 国際通用性を確保することは重要であり、国際的な評価基準を参考としつつ、検討してはどうか。

5. 評価体制について

【主なご意見】

- ・学生代表者の評価への参画はいい仕組み。
- ・若手からベテランまで様々な研究者が参画できる評価の場が望ましい。

→ あらゆる大学関係者が評価を当事者として関われるよう、幅広い参画の場が設けられるとよいのではないか。

6. 負担軽減とインセンティブについて

【主なご意見】

- ・評価とマネジメントを含め資源配分をどうするのかを考えることが重要。
- ・良い評価結果の場合には評価間隔を伸ばすなど、コスト軽減も必要。

→ 学部段階で検討されている段階別評価について、「高等教育として相応しい教育か否か」の評価と「成果（アウトカム）を伴う傑出した取組」の評価のような形を念頭に大学院においても導入するべきか。また、発展的な取組について段階別評価を導入するのであれば、良い評価結果の場合には評価期間を延ばすなど、評価者・被評価者ともに負担軽減につながる仕組みを考えるとともに、その他、良い評価結果の場合のインセンティブを考えられないか。